

史苑

第十二卷第四號

通卷第五十九號

昭和十四年七月

政治史家ダールマンとトライチケ (其三)

小林 秀雄

トライチケの傳記について

L. Banberg, Über Rom, Paris, nach Gotha oder die Wege Herrn v. Treitschke 1866

A. Dove, Der Prophet unseres Reichs(ausgewählte Schriften s. 383 Neue Reich, Jahrgang 1871)

Fr. Meinecke, H. v. Treitschke(Historische Zeitschrift Bd. 77. s. 36, 1877)

G. Schmoller, Gedächtnisrede auf H. v. Sybel und H. v. Treitschke, Forschungen zur brandenburger. u. preuss. Geschichte, IX, s. 337.

Fr. Mehring, H. v. Treitschke (Neu Zeit, Mai 1896)

Th. Schiemann, Treitschkes Lehre und Wandelsjahre (1834-67) 1896

- M. Lenz, *Aussprache a. d. Berliner Studentenschaft* (preussische Jahrbuch 1715, 1896)
- H. Grimm, E. Curtius und H. v. Treitschke (*Cosmopolis* Aug 1897)
- Headlam, H. v. Treitschke (*English historical review* 1867)
- H. Ekerlin, H. v. Treitschke 1898
- K. Th. Hei el, *Zur Erinnerungen H. v. Treitschke* (*Beitrage zur Allgemeine Zeitung* 1898)
- P. Bailieu, H. v. Treitschke (*Deutsche Rundschau* Bd. 89, s. 4-76, s. 237-41)
- P. Bailieu, H. v. Treitschke (*Biographische Jahrbuch* 1897 s. 377-89)
- R. Brade, H. v. Treitschke (*Akademische Blätter* 1896-7)
- Guilland, *L'Allemagne nouvelle et ses historiens* 1899
- A. Dove, G. Freytag und H. v. Treitschke im Briefwechsel 1900
- A. Hausrath, *Zur Erinnerung an H. v. Treitschke* 1901
- D. Kerler, H. v. Treitschke und Robert Mohl (*Preussische Jahrbuch* Bd. 112, 1903)
- R. Bauer, Treitschke und wir (*Gegenwart* 5.5 1906)
- R. Sternfeld, *Zur Treitschkes Gedächtnis im 'Tag'* 28, 4 1906
- Jacob Caro, Treitschke (*Kleine Schriften, Vortrage und Essaye* 1906)
- L. Schurig, *Der Entwicklung der politischen Anschauungen Heinrich v. Treitschkes, Dissertation* 1909
- M. Erich. H. v. Treitschke, *Dt. Bücherei* Bd. 29, s. 60
- M. Erich. H. v. Treitschke, *Eingedenktsblatt zu seinem zehnjährigen Todestage*, 1906
- L. Schurig, *Gustav Freytag und H. v. Treitschke im Brichwechsel*
- E, Zechlin, H. von Treitschke (*Akademische Blätter, Jahrgang* 21)
- G. Stamper, H. v. Treitschke (*Westermann Monatschrift* Bd. 81)
- F. Krueger, H. v. Treitschke als akademischer Lehrer (*Allgemeine Zeitung* 10, 6, 96)
- M. Lenz, H. v. Treitschke (*Kleine Schriften* 1913)
- L. Lorenz, H. v. Treitschke im unserer Zeit 1916
- H. v. Petersdorff, Bismark und Treitschke (*Bismark Jahrbuch* VI 211-308)
- H. v. Petersdorff, H. v. Treitschke (*Allgemeine Biographie* 55 Bd. 255-63)
- H. Mayne, Treitschke als Literaturhistoriker (*Gegenwart* 1 Bd. S. 50)
- G. v. Below, *Die politischen Historiker* (*Preussische Jahrbuch* Sept. 1923)
- Westphal, *Der Staatsbegriff* H. v. Treitschke.

の諸書を參考するを要す。

トライチケはチエコ系のサクソニア人で、紀元一八三四年九月十六日ドレスデンに生れ、父は軍人であり、母は軍人の娘であつた。この家はボヘミヤの Tieschky 家に出るといはれる。彼の一世はゲイテからビスマルクの時代に涉つて居り、ドイツ帝國の最變化多き時期である。

彼は十四歳の時にかの地の Kreuschule に入學したが、幼時耳を患ひ、漸次殆んど聾するに至つたので、自然彼をして父の職をつぐことを止めて、精神生活に向ふの止むなきに至らしめた。この學校はフマニスト的ギムナジウムとしては當時最名高く、立派な教授がその教育に當つてゐたのである。トライチケは既に幼時より歴史に特別な興味を有つてゐたのであるが、その熱烈な感情は周囲の種々な過去の事實によつて刺戟され、早くより時代の出來事について立派な歴史的判定を行ふたといはれる。彼はこの學校に居る間に紀元一八四八年の革命を経験し、少からず衝動を受けた。

この學校に於いて彼が最感化を蒙つたのはヘルビツヒ Heibitz 教授であつたが、この人は當時溫和立憲主義を代表するドイツチエ・フェラインの指導者であつた。彼の善い意味に於ける貴族的な性質とヘルビツヒの堅實な本質とがうまく結合されて、彼に溫和な潮流の觀念を作つたと思はれる。この頃彼はその實際政治家の本能によつて彼の目を唯一の能力あるドイツの國、プロシヤに向けた。實際

當時不安であつたザクセンが漸次平穩の状態に復したことについてはプロシヤの援助があつた爲であるから、炯眼な彼がプロシヤに着目したのも當然のことと思はれる。時の校長クレー Klee の彼に對する個人的注意も見遁す可らざるもので、クレーは彼にドイツ文學と古代の本質とを吞込ましむる爲に特別な努力を拂ふたといはれる。彼がこの學校を去るに當つてボイストの前行ふた演説はプロシヤのドイツ統一を説いたものであつたが、之が少からずボイストに貴き感動を與へたといはれてゐる。然し彼の考が一層強められたのは紀元一八五一年ボンに移つてからである。彼はボンに於いて深くダールマンの感化を受けた。彼の書翰に彼は「彼(ダールマン)は私が私の母國に役立たねばならないことを談つた。而して彼はその鋭い眼で私をみつめて、私に手を與へた時に、私は勇氣を得、いかに多くを私が爲さねばならないかを意識した」といふてゐる。この後ダールマンの懷いてゐた小ドイツ主義の思想、現在の權利に基く歴史觀念が十分に彼に傳へられたに相違ない。少くともダールマンの明晰な人格、歴史の現實の上に立てられた純粹な下ザクセン的な悟性は彼をして中古的時代錯誤、少くとも中古的同情に陥り易いロマンチック的な、神祕的な誤謬への進入から彼を救ふたことは明白である。

トライチケはボン時代にヘーゲルの作物を研究したことも見遁す可らざることで、幾多ユンク・ヘーゲリアンの書物にも接觸したものと考へられる。之は彼の書翰の中にバウアー Bauer のことを談

つてゐるのでも證明が出来る。實際新しい歴史家の中で彼程にヘーゲル思想の評價が躍動してゐるものはないといふてもよい。國家を以て倫理の中心となす點などは全くヘーゲルと同一である。然し之を以て直ちに彼をヘーゲリアンであるとなし、その學說をヘーゲルに受けたと見るのはいさゝか早計であつて、之は寧ろ時代の多くの人々と同じくかの時代一般の精神生活の產物であると思ふ方が、當を得た見方である。フリードリッヒ・マイネッケが Friedrich Meinecke その著 *Weltbürgertum und Nationalstaat* に於いて、ヘーゲルを論じてゐる所に「ヘーゲルはかの鎖の主環であつて、それがビスマルク及び其ハロルドなるトライチケに於いて其高點に達したのである」といふてゐるのは穩當な見解であると思ふ。

トライチケは十八歳の年にボンのブルシエンシャフトに加入した、この團體はドイツの未來について一定の理想を有つた同思想同志の元氣な青年の組合であつて、彼は之に幾多自作の詩を提供してゐるが、彼の如き熱血漢に取つては愉快な生活であつたに相違ない。其影響も少くなかつたと思ふ。

紀元一八六三年に、彼はライプツヒに移つた。當時ライプツヒはドイツに於ける最も裕福な都市で、北方ドイツ生産業の中心地であり、ここで最初に意識されたドイツ大工業の勢力はマルクス及びエンゲルスをして同盟を結ぶに至らしめ、ラッサレはこゝに新しき社會活動を初めて居り、既に紀

元一八四八年には共產宣言の公表を見たのである。非常に鋭敏なトライチケがかかる現象に無關心であつたとは考へられない。彼は既にボン滯留の際に於いて經濟問題の重要を痛感し、之が研究を考へたのであるが、當時のドイツの經濟説は根本的にマンチエスター學派の勢力下にあつて單に科學的に價值ある部分、經濟史のみが多少獨立な發達を示してゐたに過ぎず、彼も主としてアダム・スミス、マルサス、シスモンデ、ミル諸家の作物を研究したと思はれる。彼には果してマルクス一派の運動が正しく農民的、保守的、また軍事的なプロシヤに對して新しき未來の姿を決定すべきものなりとの明白な觀念が存在したかは別として、之を反民族的傾向と認めて非常な激烈な反感と憎惡を抱いて居た事は確實である。彼の見解によれば、かゝる人々の見解は眞實なるものたり得ず、罪惡として考へられた。彼はこゝで *Kameradia* の研究に従事したといはれるが、此地の滯在は後に彼がプロシヤ・ツオルフェラインを書く時に非常な助となつたと思はれるが、又彼の社會民主黨に對する不倶戴天的反感を作り上げたのである。

この後今一度彼はボンに歸り、こゝに一ゼメステルを過したが、之はこゝで長い間努力して來た彼の學位論文を整理する爲であつた。彼は之が爲に既に莫大な材料を蒐集してゐたことはいふまでもなく、また彼の能力發展の上ではいゝ年合であつたが、二十歳の彼としては彼が計畫した *Die Volks-*

wirtschaft in theory und praxis im 16. Jahrhundert und ihre Gestaltung」を書き上げるには到底不十分であることを感じたので、遂に他の題目「勞働の生産力」Quibus nam operis via conficiantur bonaを取る事となつた。この論文を見ると、既に各國の經濟は特自のもので、イギリスの大經濟學者の見解は其故郷的關係に基くのであるといふ彼の歴史の見解が現れてゐるが、この第三部の初にある陳述は注目を要するもので、そこに「政治經濟は歴史的分科に算用されねばならない、而して之は何等不變なる法則を有せず、却つて時代及び土地によつて變更されるものである。故に政治經濟に一般法則を紹介せんと試みる人は他の範圍からの法則によつて史學を作り上げる、之は政治經濟なるものが常に歴史的經驗に支持されるが故である」というてゐる。

國家中心主義者たるトライチケはマンチヌエター派のイギヨ、學者に反して、「經濟は民族の唯一の、また最高の仕事に非ず」と主張してゐるのは當然とも考へられるが、若い觀念主義的道德家たる彼は、市府の經濟的繁榮によつて増加する富が廢頽の増大を促進することを信じ、新しいドイツに於ける經濟的發展の裏面を完全に調和することと考へたのであつて、この論文の終に彼は、「精神文化の促進者は即ち最高の生産的事業をなすものなり」といふてゐる。

なほ彼が「婦人を單に生産的として觀察することは野蠻人的道德である」といふてゐる所に、彼の有するバトスが現れて居り、而して時代の中庸詩人が運命を觀るが如くに、彼はいふ。「自分の作物を決して讀まない詩人と同じく自分の織物を賣らなかつた織物師は不幸である。實際詩人は自己の作物が生じた満足のために、又その高い教育の爲により幸福なるべし」と。この書の中には後の時代の激烈な統一主義者の公表する觀念、即ち開けてはゐるが政治的に結合されてゐない民族は過激な俗的な觀念によつて作られねばならない」といふトライチケの最好愛する觀念が認められるのであるが、只に之のみならず、更に彼が終生長い間忠實に保持した多數の見解の談られて居るのを見るのである。

この論文の完了後、彼はハイデルベルヒに移つた。ベロー Below によると、彼はキーセルバッツハの「經濟史」の講演を聞くために此地に急いだのであるが、キーセルバッツハはこの講演を行はなかつたといふてゐる。然し彼のハイデルベルヒ行の目的は寧ろホイッセルの指導を受ける爲であつたと思ふ。ホイッセルはダールマンを師と尊崇してゐた人で、ダールマンと同じく常に小ドイツ的觀察によつて歴史事件を判定し、其目的はプロシヤによるドイツの統一にあり、非常にポピュラーな政治家であつた。トライチケは彼によつてダールマンに受けた考を一層強めたのであつて、こゝに自由の爲に刺戟された若者が政治的に考ふる成年としての發達を示してゐる。彼は既に早く統一なき自由が問題の財産たるべきかを考へたが、この際 A.L.V. Rochau の講演である Realpolitik は少からぬ影響を彼に與

へたと思はれる。彼は益々プロシヤの指導の下に内的にドイツを統一することが大なる政策の主題として他の希望に先づ可きであることを認識した。かくして此時より彼はドイツ統一のヘラルドとして現るゝに至つた。

彼は主として歴史、經濟、文學、並に政治の書を讀んだのであるが、彼の處女作として公にされたのは愛國詩 Vaterländische Gedichte なる抒情詩の小卷である。紀元一八五七年に更に其第二 Studies を出してゐる。彼の劇作は完成を見るに至らなかつた。彼は九歳の頃から切りに詩作を爲したといはれるが、彼は單に之が好きであつたといふだけで、決して彼に詩才の著しきものがあつたとは考へられなう。アルント Arndt が云ふ如くに「詩は單に彼の愛國的感情を洩す道具に過ぎなかつた」と思はれる。而して彼の文學的評論も同じ思想によるもので、彼はクライスト及びミルトンを愛し、前者にその愛國心を樂しみ、後者にその市民的自由を喜んだ。而して彼が評論家として最初の作物を出したのもこの時代で、ハインリッヒ・クライストに關する論文はそれである。之は全く自由の精神と民族的再生の燃ゆるが如き熱望の下に立つてゐる。彼はいふ。「吾人の民族が吾人の古典文學の豊富なる賜物によつてその精神的統一を意識した如く、世紀の最高の思想、最深遠な感情を告ぐる全民族の有する共通語の帶が更に統一的感情を喚起する。吾人の種々な思想家及び詩人は民族的勢力の非常に高き傾向の彼等に生存することを説明する」と。少くとも彼は總て此等の精神的英雄は吾人が意識的に或は無意識的に缺いてゐるもの、即ち強力な民族國家への復歸の傾向を有すと信じた。彼は好んで彼等の中に未來ある唯一のドイツ國家への進行の試を求めた。なほ彼は此書によつて詩人及び思想家を勵すに足る唯一のドイツ國家はプロシヤたることを示さんとしてゐるのであり、結論としてプロシヤは民族の指導に適し、プロシヤのみが民族統一を齎し得ることを言はんとするのである。

彼はスチュアード・ミルの自由論に對して、彼の意見をプロシヤ年鑑に公表した。この論文「自由」には十九世紀に於いて新しく、且つ有效な總ては自由主義の仕事であつたことを述べ、新時代の標石として北アメリカ合衆國の獨立宣言を擧げて「政府の正當な權力は被治者の一致より來る」といふてゐるが、彼によれば政治的自由は政治的に制約された自由であり、全體の國家にそれが貫通されてゐるべきもので、國家は常に非常に賢明に秩序立てられた民族生活の立派な刺激の上に立たねばならぬかならずしも議會の權力上に立つものではない。自由な人民のない議會、市民の獨立のない或圈の行政であつてはならないといふのである。トライチケは云ふ。「新しい制度の根本法について餘り無遠慮に嘲るな。之は近代世界が再び放棄されない個人自由のマグナ・カルタをその文句の中に、また愚鈍の中に含んでゐる」と。トライチケは個人的自由に關するドイツ人の熱心な愛を稱賛する、即ち彼

等の自由、科學的な創造、自由なる團體的共同作業、フマニテートと精神の眞の自由、宗教的觀察に對する完全な解放を稱賛してゐるのを見る。

次に彼が公にしたのは「社會科學」といふ論文であつて、之はロバート・モール Robert von Mohl に對するものである。モールの著「國家學の歴史と文獻」は道德的政治科學に關するもので、「政治的科學の經過は人間の全生活及び個々民族の自然的稟賦と密接に結合してゐるもので世界史の過程及び種々なる民族性の本質が之に繼續的に反映する」というて居り、その點では更にトライチケと見解を異にしてゐるものではないが、その結論に社會科學は特有な國家學より分離せらるべきものであるといふ所がトライチケの彼と相容れざるところで、トライチケは「吾人は(ドイツに於いては)國家と社會とが一致しない故に、只國家學から區別された社會學といふ考が現れる」のであつて、この二つを分つ事は不都合であるといふのである。彼は最高にして根本的な國家目的は權利であるといふ事から出發して、社會の機能は總て權利によつて調整さるべきで、之が民族分枝の多様な特殊の希望であり、故に社會及び其機關は國家の主要觀念の中にある。かくて社會學は國家學と不可分離のものである、他方勿論全國家學は社會政治的たるべきである。結局國家は根本的に統一的に組織された社會であるといふ。ダールマンの弟子たる彼は最後に次の詞を以てモールに警告を與へてゐる。彼は云ふ。

「然し爾來歴史派の裁判官は吾人に國家を組織された民族として認むることを教ふる。爾來吾人は民族の經濟的生活を歴史的意義によつて觀察することを始める。爾來結局ドイツ自由主義の最尊敬すべき老大家は政治を與へられた狀態の基礎の上に、又量の上に導く。爾來國家學は生き生きとした政治事物の觀察の爲の道を指示してゐる」と。

彼は國家科學を以て唯一の科學であるとなし、國家は必然的、また原始的なもので、之を建設し、之を支持する爲には、契約の要なきことを説き、またドイツ國家が其運命を果し、而してプロシヤは其破片を統一すべき核心たることを以て結論としてゐる。

トライチケは紀元一八五八年ライプツヒの歴史教師となり、紀元一八六三年にフライブルグに招かれたが(一八六三—六六)紀元一八六七年こゝを辭してベルリンに行き、同年更にキールに招聘され(一八六六—六七)、紀元一八六七年にはハイドルベルグに移つたが(一八六七—七三)紀元一八七四年に再びベルリンに歸つた。

彼はライプツヒ大學の教授として自ら得意としてゐるドイツ史を講義したのであるが、當時熱狂せる聴衆が彼の講義を聞かんとして四方から集つた状態は、半世紀前のフイヒテのそれを思はしめたといふ。その講義の要旨はプロシヤのみが當然總てのドイツを糾合し得べしといふことであつた。

この頃彼は紀元一八一五年から同四十八年に至るドイツ聯邦の概説を描いて、民族勢力の有害な消耗を明瞭にすることに勉めてゐるが、この計畫は他日ドイツ史の著作に擴大されたのであつて、最初三年で書き上げんとしたのであるが、終に一生の事業となつたのである。彼はフイヒテに呼びかけて「アウストリヤは吾人の要するものを與へ得ない、彼女は自由にもあらず、ドイツ的にも非ざるが故である」といふてゐる。なほ彼がライプツヒ戦の視察に際し行ふた演説はドイツ一般に非常な反響を與へたので、有名なものであるが、その中に彼は「吾人の缺くものは——國家。吾人の民族は一般の立法を有せず。國家の集會に代表者を送り得ざる唯一の人民である。外國の諸港に於いてはドイツの國旗に對して敬禮が行はれない。吾人の國は海賊と同じく旗なくして海上を航海する」と。彼は深くイタリアの例に感激し、「ビームンが爲し得たるものはプロシヤも爲し得べきである」といふてゐる。彼はドイツが一つの帝國たるのみならず、一つの國家たることを要求してゐるのである。プロシヤがドイツの總ての小國を結合し、ドイツの諸土家を消滅せしむべきであつた。かゝる意見は當然彼の母國たるサクソニヤから見れば、反逆たることは明白なことで、彼に對する反抗の聲は漸く喧しかつた。この頃彼の書いた大論文 *Federation und Centralization* がある。彼はこの書に「プロシヤは實際紀元一六四八年來ドイツに於いて偉大なものであつた、而して之はドイツ民族の最上の政治的業績である。只各の朝廷は現在の組織の繼續を望むのであるが、之ではドイツは單なる地理的な詞に過ぎない」と

極言してゐる。此時彼が彼の身上を心配して居た父に送つた書翰には「私の父はそれについて心配をしてゐるだらうが、かゝる事柄については息子の義務は只一つでない」といふて居り、彼の總ての反抗に動かない確乎たる決心のほどが十分に窺はれるのであり、彼の終生の友なるハウスラートをして彼についてフッス派の戦士を想起さしめたのも寔に當然といはねばならない。實に彼がいかに熱血漢たりしかは、彼が曾てジーベルに贈つた書翰の中に「私は餘り容易く興奮されて終ふが、いゝ頃になると私は歴史家にならうと希ふ」といふ詞で想像されるが、彼がフライタツハに對しても「自分には教師より數千倍強く愛國心が存在する」ことを告白してゐるので證明される。

トライチケは最初その倫理的的精神よりしてビスマルクの行動が外見上道徳と全然離れて居り、又非常に反動的なもので悲痛の念を以て之を見て居つた。殊にトライチケの明白なる正義觀はビスマルクの内政政策の經過に對して明に好意を持し得なかつた。殊にプロシヤに於ける憲法論争は彼をして政治的に重大な失望を感じしめたのである。紀元一八六三年に彼がルドルフ・ハイムに贈つた書翰の激烈な文句を見ても、彼のビスマルクに對する反感の如何ばかりなりしかが知られるが、彼が斷然プロシヤ年鑑との關係を離れたのを見ても明かである。

假令ビスマルクの外交政策が次第に彼の最愛する民族的希望を實現するに至つたとはいへ、紀元一八六六年に於いては、彼はビスマルクから伸された手を握ることを欲せず、また全然この宰相の爲

に活動する者はなかつた。吾人は彼が獨立的な人間として、善なりと考ふるも必要と考へざる限りは自由なる手を以て、或はプロシヤ政策を助け、或は之と争はんとしたことは彼の當時の書翰によつて明白な所である。實に彼は權力と相並んだ權力であり得たといひ得る。

トライチケは當時を概観し、而して個人がその主觀的欲望をば大問題の爲に第二位の問題として之に従屬せしめてはならず、最も正當なもの、また最貴きものを之に屈從せしめ、克服せしめてはならない。かゝることは決して正しからず、又眞ならずとは彼の終生を通しての考であつた。只彼はその正當とする總てを實現すべき權力を有しなかつた。かくて彼は總ての點に於いて大宰相を措て他の何人をも支持し得ざるを見た時に、彼の政策の道にその實際的天才的な結果の權力を向けるより外はなかつた。かくて彼は永く新しい有力な政策の解放的な勢力の下に、この時期に於ける大なる歴史的記述家となつたのである。

トライチケはその後フライブルグに移つたが、その間にビスマルクはプロシヤの爲にシユレスウイツヒ・ポルスタインを占領してアウストリヤに對する態度を世界の前に明かにした。トライチケはなほ之に満足せず、更に筆を以て彼に抵抗したのであるが、この際彼は *Bundesstaat und Einheitsstaat* なる書を著した。この書は彼が今迄書いたものの中で、最も大膽な、力強い、最統一的なもので、學

者的教授の作物とはいへないにせよ、科學的に訓練された評論家の勞作たるを示してゐる。彼はこの書中に「聯邦は詐僞で、之は平和を維持せず、平和が之を維持するものである。既に古ローマ帝國はウイデルジンとなつた。アウストリヤとの結合は不自然であり、未來は只プロシヤに屬する。——シユレスウイツヒ・ホルスタインの結合は唯一の結合ではない、總ての古い國家世界の破片からして統一的に強力な小ドイツ的國家が成立せねばならない」と述べてゐる。

紀元一八三五年十二月にトライチケは直接ビスマルクを訪問した。之は特に三つの範圍、フリードリッヒ・ウイルヘルム四世の聯邦改革案、紀元一八一八年以來のプロシヤの關稅政策及び紀元一八四八年以前の聯邦使節の報告等に關してプロシヤ文書の利用を許されんが爲であつた。之について彼の書いて居る所を見ると、「私は自由主義を有する、而して私の歴史作物は當然この考の印象を有するなべし。然し私は私の黨派の遍見から自由ならんと努力したこと、又私にプロシヤ國家及びその獨立の權力が常に黨派利害より高く存することを示したと信ずる——私は只私の書中にそれが史料から生じたことの事實がいはれること、又ベルリン文書が公平にプロシヤの不利益の爲に亂用されなかつたことを約束し得る、……私の見る限り、總てのドイツ政府の中でプロシヤは少くともその聯邦政策の過去を暗黒に蔽ふ原因を有する」と。ビスマルクは數日後自筆の書翰を以て之を承認したが、その中にいふ。「私が望むごとく、假令汝が吾人の當時の政策の洗滌を非常に純潔と考へないならば、私も

實に汝の『プロシヤは少くとも彼の聯邦政策の過去を暗黒に蔽ふ原因を有する』を採用することが止むを得ずと感ずることを信じない」と。かくて彼とビスマルクとの間の結合が成立した。而して生長し、また前進しつつあるプロシヤの大権力はその歴史家を得た。今愈々トライチケは歴史家としてビスマルク的となつた。

紀元一八六六年の普墺戦が初つて、バーデンがプロシヤ側に入つた時に、ビスマルクは頻りにトライチケに書を送つてプロシヤ本營に來ることを勧め、評論家としての彼に聲明書を書かしめ、その報酬としてベルリン大學教授の席を與へんとしたのであるが、なほ彼は獨立の地位を望み、憲法が尊重せられるまではプロシヤ官吏たり得ずとの理由で彼の要求を辭した。然しこの調和によつて彼は再びプロシヤ年鑑にたづさはることとなつたことは事實である。

この後彼はキール大學の教授となり、こゝで彼は *Die Zukunft der norddeutschen Mittelstaaten* なる書を書いたが、之は先きの *Bundesstaaten und Einheitsstaaten* の論理的結論を示すものである。*Die Einheitsbestrebungen zerteilter Völker* もこの頃の作である。紀元一八六七年至り、彼はハイデルベルヒ大學のホイッセルの後を受けたが、この頃彼は既に明に世人によつて民族的人物として認められ、尊敬を受くるに至つたのであるが、自己としては評論家を以て任じて居つた。こゝで彼は

Frankreichs Staatleben und der Konapartismus 及び *Das constitutionelle Königtum im Deutschland* を書いて居り、紀元一八六五年に、彼が前書の第一卷を父の許に贈つてゐるが、その時の書翰の中に、彼は「何れの側に記述者の心があるかをいはいない目茶な客観は眞の歴史的感懐と正確に反對するものである。判斷は自由である、作家にすら」といふてゐる。この書は彼の政治的使命と正確に反對するもので、殊にボナパルチズムス及び之に伴ふフランス政策の批難であつて、ナポレオンを以て政治家に非ず、怪物なりとし、フランスは悪い隣人で、無政府主義と專政主義との間を動くものであると極言してゐる。彼は紀元一八七〇年の暗雲を非常な憂慮を以て眺めて居つたが、戦争が破裂するや、ビスマルクの行動を賞賛して、「吾人はいかなる屈服を脱れたことよ。ビスマルクがあればど大膽に電報を公表せざりしならば、王はまた讓歩したるならん」と稱し、又「黒鷲の歌」といふ軍歌を作つて民人を鼓舞し、まもなく「吾人は何をフランスから要求するか」なる小冊子を公にしてアルサス州がドイツのものなることを論じてゐる。彼はこの勝利がドイツの無限の前途を開き、その豊富な道徳的文化が總ての民族の教師たるべきことを宣言したが、只彼は南方の輕薄な愛國心が彼の支持せる統一の計畫を破壊することを恐れた。彼は聯邦が統一國家の如くに強固なるを得ざるを恐れたが、ビスマルクに取つて十分とされたものを喜んで受け入れた。彼は紀元一八七一年に國民自由黨として國會に入り、紀元一八八八年に及んだが、文化戦争の論議には有方な役割を奏してゐる。六七年の終に於ける反セム運

動には彼は活潑に働いてゐる。

彼は民族主義者としてユダヤ人の排斥者となつたのは怪むに足らない。自由戦後多く人の頭にはドイツ民族の中に移住により、又長い間の戦により、非常な混血の成立を看過した不適当な人種的自負心が存在したのであるが、紀元一八七〇年後に於いても同様なことがあつた。トライチケはユダヤ人の弱點及び缺點について多くの他のものの如くに批判し、而してそこに何等の矛盾を發見しなかつた。彼がユダヤ人の多數に對して昂めた批難の大部分は確かに當を得たものであつた。新ドイツ主義の全勝感を最立派に代表してゐる重要な人物は相並んで幾分ユダヤの敵として現れた。その銀行に於ける勢力、出版界、學界に於ける活動はトライチケの爛眼を免るゝを得ず、彼をしてユダヤ主義の排除に熱中せしむるに至らしめた。而して彼は之が爲に Verein deutschen Studentenum を卒ゐて活動し、彼の古い友人を失ふことをも意としなかつた。テオバルト・チーグラールがいふ如くに、彼は恐らくアカデミツク的教育者の圈内に於いて反セミツク運動の擴大に最も責任を有するものであつたと思ふ。

然し彼はその後間もなく議會生活に失望を感じるに至り、紀元一八八八年には國會を去つた。之は彼が幼時耳を聳した爲めであつたともいはるゝが、寧ろ當時の議會なるものに興味を失ふた爲であると見るべきで、紀元一八八三年に書いたものに、彼が「吾人の若い帝國の總ての制度の中で、議會位惡く證明されたものはない」といふて居るのでも想像されると思ふ。

トライチケの個人的運命は漸く彼の生活を陰鬱ならしめた。彼はフライブルグに滞在した際にブライスガウの豪族の女 Emma von Bodman を妻として三人の子を擧げたが、その一人の男の子を十歳で失ひ、その柔和なる妻は肺病にかへり、病院から病院への生活に過した。而して彼自身も容赦も度合も知らずして、その頑丈な肉體を非常に強要した。かくて古い眼病と新しい腎臓病との苦痛が集中した。彼は以前から人間と友人を必要とした。而して彼はその魅力を以て、常に自分の前に友を集め、彼の覺書によつて丁寧な會談に時を過すのを樂みとしたのであるが、又旅行を好み其足跡殆んど全歐洲にあまねく、而して之によつて彼の土地及び人間の觀察を愈々豊富ならしめた。最後に彼は餘りに遅くイギリスにも渡つたのであるが、彼のイギリスに對する偏見は遂に調和されるに至らず、而して彼の嫌氣の多くがその弟子達までに植付けられたといはれてゐる。

トライチケは彼の夢が實現された後、彼が十年前に計畫した「十九世紀に於けるドイツ歴史」を書き上げ様と決心した。彼は紀元一八七四年にベルリンへの召聘を承諾したのは、之が爲に少くとも半

年はプロシヤ文庫に費さねばならぬと考へた爲である。然しランケは彼を評論家であつて歴史家でないと考へたので、この任命を好まなかつた。而して他の學者達も彼の氣分を受けて居つた。かくてランケ死後彼は漸くプロシヤ史學委員に選ばれたが、彼はその死ぬる少しく前になつてベルリン・アカデミーに入ることを許されたといふ。然し彼の著作の意志は強固なものがあつて、紀元一八六一年に「余は怠惰なる民衆に政治的存在、權力及び自由の基礎が缺けてゐること、小國の仆滅によらざれば如何なる救済も可能ならざることを示すが爲に聯邦の歴史を書かんと願ふ」といふて居る。然し今聯邦の消滅によつて、新ドイツを作るに至つた人物、政策、制度、思想の概觀を與ふことを試みるに決した。かくてこの世紀に於ける劃紀的作物の一つが出来上つた。

この書の第一巻は紀元一八七九年に成り、革命期及びナポレオン時代を含み、詳細な叙述の序説を爲すものである。この巻は自由戦とウィнна會議を以て終る。それが非常な大冊であるにも拘らず非常に歓迎され、數千を賣つたといふ。第一巻はカルルスバート勅令を含み、非常に平凡な話を取扱ふてゐるが、大部分は原史料によつてゐる。初の章は百頁以上あり、維新時代藝術、文學及び學術を概説し、戦後のプロシヤの組織を取扱ふ章は南ドイツ諸邦の觀察を伴ふ。最後の章は大學内の自由精神とメッテルニツヒの諸侯を抑壓せる高壓的方法との間の争を述べてゐる。其三巻はツォルフラインの話が初められてゐるが、この巻の中心は北ドイツの諸小邦、その支配者、その政策と其文化、復雜

なものを巧妙に組合せた有名な章である。卷四はフリードリッヒ・ウイヘルム三世の長い治世の晩年の卅年で、主として立憲思想の發達を取扱つてゐる。ツォルフラインが完成され、アウストリヤの勢力がさほど壓迫的でなくなり、プロシヤが民族生活の位置を確立するに至る。卷五は紀元一八九四年に出版されたもので、フリードリッヒ・ウイヘルム四世及びその黄金時代のプロシヤの歴史を書いたのである。彼の書は主としてプロシヤ文庫の史料によつたものであるが、なほ史料の不十分な點はある。然しこの作物は單なる政治的記述ではなくして遂にそれ以上のものが見られるのである。

この書については H. Baumgarten, 'Treishkes deutsche Geschichte 1883' があり、詳細に之を紹介してゐる。こゝに之を追記して置く。

老來彼の元氣と戦鬪力は更に衰へなかつた。社會主義を目して無政府主義となし、議論に非ず、武力を以て之に抗せざる可らざることを唱へ、またユダヤ人勢力が増大して、クリスト教と愛國心とを知らざる人物が財界及び言論界に雄飛することに不快の念を有つて居つた。彼は強力なる國家の實行的な、獨立な多數黨及び道德的市民の訓練を主張し、「吾人の時代は鐵の時代である、強者が弱者を征服するは生活の法則である」と云ふに至つたが、彼の生命はビスマルクのそれと一致せるもので、ウイヘルム二世の輝しい周圍を談る所に終る。之がこの書の最も完全な部分であり、そこには彼の溫

和な平靜がある。彼は今六十歳に達してその視力は非常に衰へたが、なほ熱心にその記述をつづけて紀元一八四七年に至り、將に革命の年に進まんとした。彼が Bailieu に書いた書翰に「私がこの第六卷を書き終るまでは神も私を取去り得ない」といふてゐるが、實際之が出来なかつた。彼の健康が迅速に衰へた。彼はウイルヘルム二世の即位を喜んだが、之も束の間ビスマルクが没落してカプリビの内閣成るや其職を賭して、盛に之を攻撃したのであるが、間もなく彼は悲觀的評論家の位置に立つに至つた。彼は未熟と不安とを感じた。彼は今新しい時代を喜びを以て信じ得るには餘りに老いた。多くのものは彼を嘲り、又彼を恐れたが、更に多くのものは彼に背いた。彼は非常に寂寥となり憂鬱となつた。その代り未知の青年の間には彼に對して非常に熱烈な歡聲が起り、彼等は彼を以て彼以前、又彼以後に見られない大きな指導者及び教師として尊敬の意を表した。

紀元一八九六年のライプニッツの日に、彼は正式にベルリンアカデミーの會員として採用さるべきであつたが、彼の死の紀念日となつた。彼が將に眠らんとした時に、ベルリン法學教授會は彼を名譽ドクトルに推薦した。かくて彼は紀元一八九六年四月廿八日を以て歿した。

トライチケの作物としては、

Deutsche Geschichte im 19. Jahrhundert I-V (1879-1894) 未完成のもので、叙述は紀元一八四

八年に及ぶ。

この書の抜萃として、

Deutsche Geschichte in 19. Jahrhundert ausgewählt und herausgeben von Dr. Veit Valentin

I-II 1927

Politik 1-2 (1897)

Historische und politische Aufsätze 1-4 (1865-97)

Bilder aus der deutsche Geschichte 1-2

Reden in deutsche Reichstag 1877-84 (1896)

Max Cornicelius, H. v. Treischkes Briefe 1-3 (1912-20)

がある。なほ單行本として公にされたものには、

Quibus nam operis via conficiantur bona

Dissertation 1853

Studien 1857

Vaterlandische Geschichte 1856

Die Geschichtswissenschaft 1859

Die gerechte Verteilung der Güter 1874

Zehn Jahre deutscher Kämpfe 1874

Der Socialismus und seine Gönner 1875

Der Socialismus und der Meuchelmord 1878

Deutsche Kämpfe, neue Folge 1897

Preussischer Jahrbuchern von 1863-1895

Gustav Adolf und deutschen Freiheit (in den Sing-Akademie zu Berlin 9 Dec. 1894)

がある。

余は此等の諸書によつて、彼の學說を考へ、更に進んで其歴史觀を述べようと思ふ。

ドイツに於けるアウストリヤとプロシヤとの權力競争は長い歴史を有する。而してフランス革命後、自由主義者によつて三Fと綽名されたアウストリヤの宰相メッテルニヒの反動政策は、自由主義者をしてプロシヤに向はしめたのであるが、フランス革命の半頃から擡頭して來た民族主義者は人種博覽會の狀況を呈したアウストリヤを包含せる民族統一の不可能を見て、プロシヤを中心とせる比較

的純粹なドイツ民族より成る北方ドイツによつてドイツ民族よりなる統一國家を作らんとし、ドイツの政界はアウストリヤを包括せる大ドイツ黨と之を排除した小ドイツ黨とに分るゝに至り、ドイツの自由主義者、統一主義者の多くは小ドイツ黨としてその目的達成に活動した。既に述べたダールマンの如きホイッセルの如き何れもこの黨に屬すべき人物であるが、トライチケは勿論この小ドイツ黨人であつて、熱心な自由主義者であり、又激烈なプロシヤ統一主義者であつた。

トライチケは若くからして熱情的な自由主義者であつたが、彼の自由主義はドイツ的傳統に基くものであつて、其淵源を遡くドイツの古典時代に置くものである。彼の自由主義はミルの自由論に現る如きイギリス的自由思想とは全く其趣を異にしてゐることは、彼がプロシヤ年鑑に論じてゐるミルの自由論批判に明瞭である。ここに彼が問題としてゐるのは、個人的及び政治的自由であるが、彼の理解してゐる自由觀念は正しくドイツ古典時代の觀念的自由とその政治範圍に於ける作用とであり、換言すれば、ドイツの市民的自由思想である。勿論ドイツの自由思想が紀元一七八九年のフランス的思想の影響を受けたことは拒れないことであるが、之は主として南方ドイツ地方に其勢力を作つたのである。然しこゝですら既に之に包含されてゐた契約説の如きは從來存在した強力な古典的自由思想によつて明白に克服されてゐるのであり、而して紀元一八一四年の自由戦役はドイツ的自由觀念を抱

持してゐた人々に幾分政治的には之に相當したものに到達せしめた。然しこの人々はその貴族的な傾向よりして一切がかゝる政治權利に従屬するものであると考ふることを欲しなかつたのは事實である。既に彼等の中には健全なる政治自由、即ち民族自主の第一要件は民族的な統一國家であるとの考が躍動して居つたのである。而して此等の人々、またトライチケも紀元一八六一年に於いては理論的には完全に社會的、又經濟的自由主義の代表者たるに至つたのであるが、まだどこにかゝる要求の實現には之に伴ふべき相當なる損害を免れずとの考の潜在するものがあつて、今好んで再び古典時代の國家觀念に復歸するに至つた。殊に此際ヘーゲルの國家學說が最良の人々の間に勢力を作り、民族國家への要求を強めるに少からざる貢獻を致したのであるが、之が更にビスマルクの指導の下に實現への方向を取るに至つたのである。

今トライチケは先にダーマンが考へた如くに政治自由は國家的に制約された自由でなければならぬといふ原則上に立つて、自由は只國家の中に成立し得るものであるといふヘーゲル學說と結合するに至つたのも當然であり、かくて既にトライチケは政治的に考察することを知つて以來、ダーマンの學說を追求するに至つて以來正しく確信ある王黨であつた。彼はマキャベリのプリンケツプを愛讀し、其影響を被つたといはれるのであるが、之は全く表面的な觀察で、彼をして常にその陥り易き過激主義より轉向せしめたものは彼の深い歴史的感情であつたといひ得る。彼は強力な王者にして初

めて政治自由の可能なる觀念を實現し得べき民族國家を構成するを得、而してかゝる王國の下には當然立憲的な、制約的なものが成立し、こゝに必然的自由の制度が出現すべきであるといふ結論に到達した。彼は健全なる制度の下に何を理解したか。之については彼自らがいふ如くに「ロハウのリアルポリチークが五十年代の優良な人々には電光の如くに輝いた」のであつて、かのラッサレですら同様であつたことを彼の作物なる *Reden über Verfassung* 1862の中に述べてゐるのを見る。

彼は社會の實際權力なるものを考察し、之を尊重したのであつて、彼が無効なる學說や、組織から遠ざかつたことについては、晩年に彼がかゝる現象は若い時代及び老年時代の弾力性の欠乏によるといふてゐる位で、確かに彼の強點であつた。彼は民族の熱望をば無判定に洞察し、又多分總ての現象に對する自由なる評價を妨止してゐる所はないが、之は彼の心の民族的結合の正當なる熱望が一切を超越してゐることの事情を告ぐるものといひ得る。

トライチケは決して人間の本質を空想的に考察することを爲さなかつた。彼が人間を、また人間性を如何に考ふるかは、彼の民族生活に於ける心理的要素を談る所に、時々鋭利な光を現してゐる。彼は常に意志、ことに力に満ちた貴き意志が、人間また民族に取つて最價值あるものなることを主張する。之は特に人間に、また自然に勢力を認めるマキャベリの説を思起さしめる。然しこの際此等二人

の間には明白な差別が存する。トライチケには意志の方向は明白に倫理的であつて、ナポレオン一世の如くに觀念的・目的への方向なしに單に勢力のみを見ると信ぜられる場合、彼は戰慄して轉換するのである。彼はかゝるナポレオンの個々の記號及びナポレオンの詞の貧弱に満足せず、彼の全生活及び事業を總括して、かゝる内容なき巨人精神からある姿を作らんと試る場合、明に古典的に教育されたドイツ人たるを示すのみならず、實際的な心理學者たることを示す。實際偉人の行爲の權利はその最後の觀念的に正當な目的によつて判定さるべきであるといふ事は全くマキャベリの要求しなかつた點で、トライチケに取つては之が主要の問題なのである。トライチケのナポレオン一世の判定に際しては、ドイツ人のフランス人に對する惡しみが偶然に現はれてゐると思はれるが、ナポレオンとケーザルとを比較する場合非常にナポレオンに不利であつて、そこに眞實が存するのである。かくて彼は單に個人の權力争上に立てられた勢力を過重するものではなく、個人及び社會及び民族の生活に於ける觀念的勢力をば相當に評價することを知つて居つた。而して彼が個人的勢力及び此不可量物を遍見的に止揚することを爲さず、却つて殆んど常に此等をそれら相互の正常なる關係によつて認識する所は、彼が思想家であり、政治家であり、又歴史家として意義ある點であつた。

彼は信仰に表れる全然量の可らざる心の力に無暗に對立することをしないが、その最良の年輩の頃には、その中に存在する幾分不眞なるものを看過することが出來ずして、彼がクロムウエルを評せる詞の中に「クロムウエル及び總ての宗教的熱情の英雄は偽善に近い自己偽滿の秘密な支配から自由ならず」といふてゐるが、ウルトラトモンタニズムの明白な反對である。彼はローマンカトリツシズムの觀念的方面を無視せざると共に、その禮典の審美的方面を評價することを理解して居つた。彼が其師ダールマンに談る詞は彼特有の意見を表現してゐるもので、「之が明白にプロシヤ及プロテスタント的政策を追及すべきであるといふ吾人の學說の批難となり、又その純眞な感情が嫌忌の念を以てアイヒホルン内閣の下に人爲的に教養されたクリスト的、ゲルマン的信仰より轉向せしむるものである」と。

彼は吾人民族の自由な精神生活をば、貫ぶべき寛容によつて包括する無數の個人的な信仰認識を要求する。而して彼の特有な信仰認識は彼が紀元一八七〇—七一年に關して述べてゐる「この日の恐怖と困難とについては意味深く支配する神的理性の前に、總てが敬虔に屈從する」といふ詞に明瞭である。

トライチケは個人及び民族の生活に於ける觀念的勢力を充分に現してゐない。或はそれが古い習慣、民族性、宗教愛であり、或はそれが標語とされ、また平たくされた原理的權力である。

既に述べた如く、彼は實に單純な唯物史觀が輕卒な觀念史觀と同様に正當なものでないことを知つ

てゐたが、決して歴史に於ける社會的關係の勢力を看過しはしなかつた。彼はいふ「肉體と精神とは分たれない。歴史關係は思想動作或は國家の制度、社會の狀態との交互作用に於いて觀察される場合にのみ推論を得る」と。彼は實際之によつて歴史を取扱ふたのである。

トライチケの國家觀は二つの方面に區別せられる。一は政治的で、國家を自己目的として上から見る治者のそれで、他は社會的で、國家を目的の手段として下から見る被治者のそれである。この二つの觀察はそれ／＼純粹に代表的のものとすれば、その一面性に於いて間違であると思はれる。彼はいふ「フアルスタッフがいふ如く、この争は全然批難されない問題である。總ての世界は國家とその市民とに相互の權利と義務との關係を結合することを許す。相互に目的と方法とを考ふる本質の間に反對は考へられない。國家は總ての生物の如く自ら目的であるが、國家が總てのその市民の如くに、同様な現實的生活を導くことは、何人も拒み得ない」と。然し彼は市民の生活性を争はないから、彼には國家の爲に總てを包括する社會體をば更に高い單位として考ふるといふ調和が起る。

彼の國家に關する學説は次の文句で總括される。彼は云ふ。「國家は隨意の作物ではなく、人性の本源的財産である。この財産を無限の歴史の經過に於ける益々豊富にして強固に發展することは人間自由の目的である。人間道德は國家に於いてのみ完成に達する。國家は義務に相當せざる權利を有し得ない。

い。國家形式は種々なる民族を幸福に、或は不幸に至らしむるが故に、政治的自由は單に、又根本的に組織の形式に存せず、却つて其法則は民族性格の忠實なる表現である。斯して民族の最良なるものにより確信を以て支持さるべき國家は自由である。自由の發展は斯る受動的國家思想の有力な勢力に構成され、總ての市民を政治的働作に導き、國家の強力を民族其物の行爲によつて證せらるゝに到る。總ての國家形式及び總ての民族を正當ならしめ、また總ての政治的形式主義と争ふ國家の倫理的觀察は歴史知識の重き下層建築の上に立ち、又それによつて決して完全にポピュラーになり得ない。然しその最重要な結果は多様な迂路によりて既に吾人民族の大部分に血となり肉となつた。之がドイツ人に、少くともプロシヤ人には、彼の國家に現す敬虔に、他の民族には非常に忍び難き國家負擔を吾人自體の優逸として賞讃する生き生きた義務感に現れる。而して今この、更に重要な科學的な作業に於いてプロシヤ國家の犠牲的歴史に成熟したドイツのイデアリズムは外人には理解し難き謎である」と。こゝにも彼の政治生活の現實性に關する觀點が現れてゐる。實にトライチケの國家觀は漸次益々遍見的となり、彼は彼の民族の師として、又指導者として感じ、又特にそのアカデミックな青年は生きた國家觀を以て充され、又プロシヤ國家への服従を目的とする義務ありと信ずるに至つた。

ビスマルクやトライチケの如くに、プロシヤに關する傳説の力を正當なものとして尊重する人に取つてはプロシヤ王を以て最も強力なる權力手段、殊にプロシヤ軍隊を支配するものとなすが故に、當

然彼が新しいドイツ國の指導を企つべきことを希望した。而してトワイチケはプロシヤのヘゲモニーを要望する點によつて總ての他の考を決定したのである。プロシヤ王の權力は立憲的に制約され、全ドイツに對する支配者としての權力も新しいドイツ議會によりて餘りに嚴重に限定されたのであるが決して外見的な王國統治までに低下する危険はなかつた。トワイチケはプロシヤ王が其傳説、殊に經濟的強力者の壓迫に對して小人を保護するに忠實ならんことを希望し、又この理由よりしてプロシヤのドイツに於けるヘゲモニーの完成を切望したが、殊に彼はトンケビーユの學徒として只強力な王のみが總ての黨派を超越して立ち得べきことが眞理であると考へて居つた。

勿論彼はライプツヒ時代はまだ青年であつたので、當時既にかゝる見解を抱持してゐたとはいはず、寧ろ想像してゐたといふことが正當であると思ふ。然し彼はグスタフ・フライタツハやカルル・マケー等の如き老思想家との交際よりして明かに必然的に制限された内政的自由の認識を得、また一見した所正當と思はれるビスマルクの國家政策に同感すべき道を作つたのであるが、その成熟と共に、彼の時代の政治的必然性として表された雄大な國家觀に到達したものである。

曾てランケが政治家の政治學説はドクトリンの一般的意義の爲より瞬間の利用の立場から評價せらるべきかといふ疑問を投じて、之について「彼等はより多く事實から生長し、或は之が彼のものを發成するが、之は彼等自身の爲に愛せられ、或は彼等から約束される利用の爲に愛せられるか」とい

ふ。實際このものよりは彼等の力を更に奪ふものでない。エズイタ教義は復興された法王制度、或は寧ろその物が存する世界的要素の希望を實現することにより、そこに支配する神學的確信の意義を有する組織的基礎によつて新しい力を得た。このものは勝利が屬すべき人に方向を指示する」と。このランケがエズイタ教徒の國家説を評價したと同じ立場で、トワイチケの學説は觀察さるべきであると思ふ。之は絶對の眞理ではない。彼は少くともドイツ國家に對しては歴史家としてではなく政治家として考察してゐる。彼は種々に分立してゐる國家の夢を見てゐるのではなくして、之を國家社會の中節であるとして觀察してゐるのである。

トワイチケの國家は如何に民族の社會に排列されるか。之に關する彼の見解は明白であつて、戰の必然性についてすら述べてゐる。ドイツ人の敵は實際彼の論文を承認すべきも、彼のドイツ世界支配のヘロルドたるを認定することは不可能なるべし。トワイチケは正しくかの實際的民族國家に主觀的に權利ある個性を見る。之は最高權、即ち主權を有するが故に他に從屬するを得ず、從つて國家に取つて戰爭は唯一の可能物として残り、生活問題の爭に際しては一國は他國と對立する。

トワイチケはフイヒテ及びヘーゲルと聯結し、戰爭の道德的必然性の高さを歌歌ふ。彼はいふ。「國家は主權的權力により組織された民族であり、第一の任務——自己決定——内外の敵に對する保

護である」と。又云ふ。「初から民族裁判に屬すべき戦を辭する國家は言はんと欲する主權を自ら放棄するものである」と。又云ふ。「永久の平和を夢みるものは愚人であるのみならず痴人である。彼は學校的思想誤謬を行ふ。永久平和を實現し得べき人間國家には多様な民族生活の不可思議な光輝の失はるゝのみならず、文字通り政治思想は止む。國家は人格であり、全く他の多數の政治的人物中に算へられる。個々の人間の如くに民族は昂まれば昂まるほどその性格の特徴が銳利に形成される。彼が支配する小さい世界に於いて總ての全人、總てのマイステルが支配する如く、總ての人が他人と同様に考ふる——同様に、また更によき權利を以て總て大民族は豊富な人間道徳を作る多數の道德力により、或物が正しく地上に最高の發展を遂げたことを知るが故に他の民族に劣らざることを信ずる」と。

トライチケがこゝに考ふるのは主權國家の神代であつて、總ての觀念的勢力が主權的民族國家を作することに努力する時から明白であるが、之が彼自らには思想的誤謬として走つてゐる。總ての國家は總ての國際的契約によつて既に其主權の一部を放棄してはゐないか。主權國家が永久の問題について仲裁裁判に服従するならば、そこに非常に大きな幸福が存するか。而してかゝる仲裁裁判の組織は漸次益々構成され得ないか。トライチケはかの永久の平和を實現し得る人間國家に於いて國家的個性及び結局政治的思考がやむと考へながら、然も直ちに假令總ての共通の法則及び裁判に服従するともその性格を損するを要しない個々の人間と國家とを比較してゐるのは非論理的な思想的飛躍といへる。

トライチケは種々な民族個性權利を認むるが、之は正しくその本質を認識し、又一般法則への服従を理解し得しや否や。而してかゝる世界戦の慘憺たる經驗はこの思想經過を再び詳にしてその實現を望ましきものとして現さざりしやいかに。他の民族個性の認識は健全なる超民族主義に導かざるべきか。吾人はトライチケが他の民族のドイツ國家に對する嫌惡をはどから引出したかを考へねばならない。

彼はいふ、「世界に於いて至る所に今日國家の民族經濟的見解、多くの金と少い義務の欲望、而して殊にドイツの歴史的國家科學が長く克服した政治的形式主義が支配してゐるのを見る」と。

彼は總ての民族は其特有の政治的ドクマチックを有し、この堅固な形式によつて、彼等は未知の状態の價值と無價值とを計るのである。イギリス人は單に彼の故郷の發達した歴史が作上げた議會制度なしには考へ得ない。マコーレーの歴史家的精神すら強力な軍隊が成立し、而して軍隊が議會の徵募法に依つて承認される所に專政主義を見る。スウイス人——而して之と共に母國を有せざるドイツ移民——は共和國を誓ひ、或は更に正當にいへば王國の否定を誓ふ。イギリス人はイギリスの名義的な王の下に多少の自由が榮ゆることを許す場合、他を爲すことを考ふる。ロシア人は原始スラブ團體の原始共產主義の自由を求むる。總てのローマ民族にはかの八十八年の觀念が簡單に政治的福音として考へられる。然しドイツ人の中に於いては教育あるものゝ共同財産は總ての民族を自體として宣明する自由感情である。之は科學に於いて長く認められてゐるのではなく、ランケがフランスについて

記する場合、總ての人は民族生活の徹底した理解を期待するといふてゐる。然しマコーレーのフレデリック大王に關する作物は作者の不名譽といふほどではないが、それが正しくイギリス的である。而して他のイギリス人カーライルがフレデリック大土を愛し、よく之を理解したことはドイツ人に取つては期待せざる幸福で、吾人が感激し賞讃すべき所であると考えよう。

又ドイツの全然獨立せる、全然特有な文化は民族的經濟的見解、又總ての政治的ドグマに對して同時に戰を宣告する。外人のドグマ的に結合されてゐる判定がドイツに對していかに關係するか。總ての原則に反して、最初は信仰について藝術、科學に若返り、而して初めて民族國家の自由な精神的生活の根柢の上に立つ——觀念全世界を克服した權力たる正據——觀念主義の民族にいかに關係するか。而してその強力な王を外人は好んで專政的といふが、その市民はその國家に對し只アメリカ人のみがその同盟の維持の爲に爲したる如き不可思議なる犠牲をば喜んで爲し、またその國家の最良好な誹謗者はその作物に對し他の共同體が國家的と考ふるより更に自由に、廣く多面的な目的を示す。ドイツ人はその信仰に於いては中間民族で、歐州の唯一の、平等な大文化民族なるが故に、世界の見解によれば、ドイツ國家は互に相排する多様な文化目的に到達すべく試るものである。ドイツはフランスの中央集權的軍國の如く外方に發展せんと欲し、又同時に然らざれば只中立的小國家に可能なる獨立をかの州及び村に許さんとする。ドイツは強力な王が有力な民族的代表と共に重大なる國家負擔

をば廣き國家市民的權利によつて運ばんことを希望する。ドイツは王の官僚の技術的妙技がイギリスの自治的自由運動と結合せんことを欲する。ドイツは充分の開けた民族が同時に武裝せる民族たり得るとの謎を解決した。ドイツは曾て吾人の民族經濟が他の地、廣き地域を收得せしならんも、また如何に富有なる民族が戰士的道德の支柱、其同心、道德の單一、意志と肉體との力を支持してゐるかといふ重大な問題を解決せねばならない。ドイツはその民族にローマ人の頽廢に落つる事なく、美しい人道的民主的道德を持続せんことを望む。ドイツは古い教會と吾人の全民族を充すプロテスタンティズムとの精神を苦むることなく、そのよき權利を保證せんことを望む。ドイツは結局民族に残らざれば、單に民主的なるべき藝術及び科學の貴族的位置を保持せんとし、而して實に學校的強制によつて、然らざれば單に民主的たるべき民族文化の平等性の爲に苦慮するものである。吾人はなほ吾人がどこまでこの觀念が到達せざるかを充分に知つてゐると考ふる。

トライチケはドイツの國家的發展の傾向が彼等に向ふべく常に忠誠なるべきを考ふるのは正當である。他の民族は之を感じる。而して彼等はこの卓越を怖れ、ドイツ人との競争に強へらる場合、ドイツ人に從つて組織する爲に彼等の美しい形と分離するを怖れる。而して正しくドイツ人の最高慢な最危険な敵なるイギリス人はドイツ人が彼等に優ることを默視し得ず、また承認することを欲しない。

トライチケは今日のイギリス國家の性質を充分に洞察した。彼はフイグ黨の歴史家がその後スチュア

ド家の驅逐に際しドイツの共力を全然無視し、或は全然後景に置き、議會的イギリスがプロテスタント的ドイツに負ふ所の感激を立派な英語で書いてゐる事を告ぐるが、常にイギリスの妄恩を談つてゐるといへる。彼は其ドイツ史に於いて高慢な島の嫉妬と友義とを正當に叙述することを全然沈黙してゐる。而して彼はイギリスが導く物質的運動の基礎を簡單にボナパルト的商業政策として記してゐる。既に彼は紀元一八八五年に、早き世紀の蠻人を思ひ起す海上の世界支配の撤去を要求した。而して既に紀元一八七〇年に、彼はイギリスを百年長く總ての海上に民族權の法則を罰せられすして蹂躪した島として記述してゐるのを見る。